

## 北清事変期の医療と看護

—広島陸軍予備病院を例として—

千田 武志<sup>1)</sup>、坂村 八恵<sup>2)</sup>、岡本 裕子<sup>2)</sup>、隅田 寛<sup>3)</sup><sup>1)</sup>広島国際大学医療福祉学部医療経営学科, <sup>2)</sup>広島国際大学看護学部看護学科<sup>3)</sup>広島国際大学保健医療学部診療放射線学科

日清・日露戦争に比較して小規模なこともあり、北清事変期の医療に関する研究はほとんどなきに等しい。しかしながら、日清戦争期における医療の成果がどのように受け継がれ問題点がどのように解決され、それが日露戦争期にどのような影響を与えたのか知るうえで、北清事変期の医療は重要な役割を担っている。またこの時はじめて登場した技術や問題点も存在した。こうした点を踏まえ本報告においては、日清・日露戦争期との関連を念頭におきつつ、唯一の陸軍予備病院が開設された広島に例をとり、そこで展開された医療と看護の実態を明らかにする。なお北清事変の特徴として外国人患者の治療があげられるが、その点については、他の報告にゆだねることにする。

日清戦争において兵站基地として重要性が証明された広島市とその周辺には、明治30(1897)年に陸軍糧秣廠宇品支廠、大阪砲兵工廠広島派出所、台湾陸軍補給廠運輸部、31年には衛生上において重要な役割を担う広島軍用水道が完成するなど、その後も陸軍軍事施設の設立があいついだ。また本事変においても、兵員・物資の発進基地となった宇品港を有する広島は、各部隊の受入れや見送り、傷病者の収容、治療と看護、検疫、凱旋部隊の歓迎会に忙殺された。

北清事変にともない広島陸軍予備病院には7,919名が入院し、そのうち5,029名、63.5パーセントが治癒しており、日清戦争に比較して好成績をあげた。これらの患者を病類別にみると、戦時特有の外傷不慮は1,096名(13.8パーセント)と日清戦争時よりも比率は増加しているものの、やはり全身病の3,492名(44.1パーセント)、栄養器病の1,338名(16.9パーセント)など、病者が圧倒的に多い。また全身病の内訳をみると、脚気と伝染病があいかわらず多いが、伝染病のなかにコレラはみられず、そのことも日清戦争期に比較して死亡率を減少させたものと思われる。なお外傷の治療にレントゲンが大きな成果をあげるが、これは軍医学校教官の芳賀栄次郎などの派遣とともに外国人患者を意識した面が強かった。

明治33(1900)年7月19日より34年3月5日まで、日本赤十字者救護員205名が広島陸軍予備病院に派遣され、1,206名の患者の医療と看護に従事した。これは日赤救護員591名の34.7パーセント、全患者数1万2,586名の9.6パーセントにあたる。この間救護員は、一名の医師で100余名の患者を診察し、看護婦も一名で32名の患者を担当し、定時に食事をとることもままならず、夜間も一睡もできないこともあった。

こうした救護活動に対し陸軍は、「臨時備入レタル看病人ハ未タ執務ニ熟セス此際赤十字社看護婦ハ最モ効力ヲ現ハセリ」と高く評価した。またこの戦争を通じて全国から救護団を派遣しうる体制ができたこと、外国人患者の看護においても好評をえたことにより、国際組織である赤十字社としての地歩を築いたことは、日赤にとって大きな成果であった。

これまで日清・日露戦争期との関連を意識しつつ、北清事変期の広島陸軍予備病院における医療と看護について述べてきた。その結果、日清戦争期にくらべて治癒率が向上したこと、また外傷の治療にレントゲンが使用され効果をあげたこと、看護においても日本赤十字社が全国から救護員を派遣できる体制を確立したこと、外国人患者の看護を通じて国際的評価を高めたなどの成果をおさめたことが明らかになった。ただし脚気の治療においてなんらの改良がみられないこと、看護婦に対し相変わらず本来の看護技術以上に、従順で風紀上の問題を起こさないことが求められたなどの問題点が残った。